

12月14日(日) 14:30～ シニア劇団浪漫座「浪漫座版 古事記物語」

菊地奈々子

古事記の物語全般をレクチャーするというお芝居だった。案内役3人が可笑しさのある巧みな話芸で観客を古事記の世界へと導く。

各シーンにオブジェが、まるで欽ちゃん仮装大賞のように登場し観客を楽しませていた。特に八岐大蛇のオブジェは印象に残った。

ダンスもあり歌もあり、観客参加の相撲ゲームもあり、観客をいかに退屈させずに楽しんでもらえるかを考えた工夫があちこちに施されていた。大人の遊芸会のような……。

シニアの皆さんがとても楽しそうに、そして体力の限界もどこかで感じながら頑張っている姿が垣間見られ、特にアラナミテレサさんが89歳でいらっしやることに驚きつつ、松島さんの貫禄もご健在で、全体に人間の生きる素晴らしさみたいなものも感じた。また女性ばかりの中で一人の男優が注目を引き、色を添えていた。

作品としては、古事記のそれぞれを浅く紹介するのではなく、やはり物語の深さを感じられた方がより良いのでは？ もう少し心にグッとくるよう感動させていただけたら、笑いも深い笑いとなり、心に残ったであろう。

追記：巡業もされているようで、ぜひお体に気を付け、生きがいを感じつつ続けて活動されますことを祈っています。

総評

最初の3つ(FOX Works・MUNAPOKET・M-planet)が上演され、何となく共通点を感じられた。「悪(戦う相手)を倒す」

4つ目(からっかぜ)も悪とではないが、戦っていると言えば、そうとも言えるし、5つ目(浪漫座)もやっぱり戦っている。

人は戦いながら生きているんだ、と再確認した演劇祭だった。

以上 菊地奈々子

はままつ演劇フェスティバル2025 劇評

澤根 孝浩

シニア劇団浪漫座

「浪漫座版 古事記物語」

2025/12/14 14:30-回

笑いのちりばめられた演劇、歌、ダンスと楽しませることを劇団全体で取り組んでいると感じた。そして、その取り組みは成功していた。

観劇している際にトラブルが発生していると感じた場面もあったが、それも笑い変える空気があったのは劇団と役者の力だと思う。

美術と照明はシンプルながら効果的で良かった。脚本も個性的な役者が生きる良いものだった。役者陣は一人一人が、個性が溢れていた。演者が存分に楽しんでいる姿、そして、それを観て楽しんでくださる観客、そして、そこで生まれる空間が劇団の最大の魅力だと存分と感じた公演だった。カーテンコールへと繋がる最後の演出が観ていて清々しく、とても良かった。

シニア劇団浪漫座 古事記物語 (12月14日(日) 14:30~)

皆さんが本当に楽しそうに舞台上に立っていることが強く伝わってきて、観ている側も元気や勇気をもたらえるような作品だったと思います。舞台装置は種類が多く、見ていて楽しく、仕込みや準備も相当大変だっただろうなと感じられるもので、その頑張りが素直に好印象でした。中でも八岐大蛇の造形は特に印象的で、こういう風に表現するんだと感じさせる攻めた表現だったと思います。アマテラスがこもる岩の表現や、火の神が増えていく場面で道具を舞台袖から少しずつ見せていく工夫なども、舞台的なアイデアとして面白く感じました。

衣装も非常に鮮やかで、登場人物それぞれにしっかりとした個性があり、舞台上に人が立っているだけで色が生まれ、楽しい雰囲気を作り出していました。舞台全体を横だけでなく前後にも大きく使い、奥行きを感じさせる動線が取られていた点も良かったです。

照明は全体的にカラフルで、ホリの発色もきれいで見ていて楽しいものでした。舞や歌の場面では左右から入れ替わるように光を当てるなど、ライブ感のある現代的な使い方が印象に残りました。一方で、語り手組が話している間ずっとホリが青かった点については、意図が少し分かりづらく、舞台端に立っていたことを考えると、必ずしも必要ではなかったのでは、という印象もありました。物語シーンのみでの使用でも十分だったかもしれません。

音響は音楽が多く使われており、歌の挿入も非常に多い構成でした。セリフではなく歌で感情や状況を表現する場面が多く、ミュージカルというよりはショーに近い感覚を受けました。ただ、全体的に音量がやや大きめで、役者さんの生の声とのバランスという点では、気持ちもう少し抑えてもよかったように感じました。

演出・脚本面では、メタ的なセリフや浜松にちなんだネタ、流行を取り入れた表現など、遊び心と「地元で楽しんでもらいたい」という姿勢が強く感じられました。客席の扉から役者さんが登場したり、観客を舞台に上げたりと、観客を巻き込みながら進行していく点も印象的でした。特に、観客を舞台に上げる際に役者さんが素に戻らず、キャラクターを保ったまま進行していた点はとても良かったと思います。語り→再現→語り、という構造によって、常に誰かが何かをしている状態が保たれ、間延びしなかった点は作品の雰囲気によく合っていました。ただ、語り手組の3人はキャラクター性や動きがとても魅力的だった分、ずっと舞台端に収まっていたことに、少しもったいなさや贅沢さも感じました。

踊りは衣装や道具、動きがきれいにまとまっており、しっかり練習を重ねてきたことが伝わってきました。古事記という既存の物語をベースに、親しみやすく再編集する試み自体も良いものだったと思います。ただ、その分、終盤の着地点にはやや甘さを感じ、楽しく展開してきた流れに対して、少し唐突に終わってしまった印象もありました。きれいに終わることが正解とは限りませんが、情報量が多かった分、もう少しまとまりが欲しかったという気持ちも残りました。

役者さんたちは皆、純粋に舞台を楽しんでいる様子が伝わってきて、観ていてとてもほっこりしました。一方で、抑揚や滑舌など、まだ改善の余地がありそうな部分も感じました。ただ、この作品は「シニア劇団浪漫座さんがやるからこそ成立している」という雰囲気が強く、若い人が同じことをやると全く違う印象になってしまいそうだなとも思いました。シニアになっても積極的に舞台に立ち、表現を続けられるという姿を見せてくれる点に、大きな価値がある作品だったと思います。

内容としては正直演劇というよりはショーのようだなと感じる部分もあり、純粋に演劇作品として観

ると物足りなさを覚える人もいるかもしれません。ただ、14:30の回で客席がしっかり埋まっていたことから分かるように、非常に愛されている劇団さんであり、舞台を身近で楽しいものとして感じてもらうという点では、とても大きな役割を果たしている舞台だったように思います。

きっちりとした流れのあるカーテンコールや、舞台終了後に関わった人や今後の予定を丁寧に紹介する姿勢から、関係者一人ひとりとのつながりを大切にしていることが伝わってきました。裏方が紹介されることは少ない中で、しっかりと敬意が払われていた点には、素直に嬉しい気持ちになりました。

しむ

「レコード盤」

(12/14…10:30 シニア劇団 浪漫座 「浪漫座版 古事記物語」)

1857年に音声を紙に波形として記録したのが、レコード盤の始まりらしい。以降、音声（音楽）は、いろんな媒体で記録再生され、今や配信がメインな世の中となり、レコード盤は衰退して来た。が、ここ数年、「温かみのある音、ジャケットのデザイン性」などからレコード盤が注目されている。(2022年、日本国内では213万枚以上のレコード盤が生産された。)レコード盤は傷がつくと音が聞けなくなるため、扱いにも少し注意が必要だ。そんな手間も含めて、レコードを聴く。“レトロ感?”が現代人の心を癒すもののひとつ、まるで、コーヒーをドリップして飲む、そんなちょっと贅沢な時間にも感じるのかも知れない。

年末に恒例の「日本レコード大賞」(1959年創設)というものがあり、現在でも、その年を代表する曲を決める。令和の今でも「レコード」と謳っているところがいじらしい。今年ももうすぐ決まるのであるが(12/17現在執筆中)、一昨年、去年と、Mrs. GREEN APPLEが連覇している。はたして、3連覇なるか? そのMrs. GREEN APPLEだが、主宰の大森氏は楽譜が読めないそうだ。

小椋佳やあいみょんも、楽譜が読めないらしい。が、素敵な曲を作る。

曲というものは、“楽譜”で紙に書くことが出来るものではあるが、生で聴いたり、レコード盤のように音を直接記録再生したりすることでも楽しめる。また、伝承とされる祭りの笛太鼓などは、元を探れば口伝であろうと思われる。つまり「楽典を知らなくても音楽は楽しめるし、素敵な曲は作れる」。勿論、異論はあるだろうが…。

演劇にも様々な演技術が存在はするが、ご存知の通り、それが全てではないと思う。浪漫座のように、「みんなが楽しいもの」を目指すスタンス、地元根付き、高齢者にも優しい。それも演劇のひとつの形であると思う。

ただ、“演者だけ”“身内だけ”が楽しいものだと、本当の一般客は「…」となってしまう。

今回の演目も、台本的に“レビューショー”の羅列ではなく、もうひとつ何か通して観られる“物語”があれば、見やすかったのではないかと思った。お客様のことを考える。そこが「発表会」と「お芝居」の違いになのかも知れない。

滝浪倫邦 (オトナ青春団)

〈全項目 30 点満点で評価 18 点〉

受付から送出し…4/5

- ・全体の動線がうまく確保されていたように感じた。
- ・出演者が多いので、ホールロビーではなく、会館のロビーでお見送りをしていたのは、一般の人達には、ちょっと邪魔だったかもしれない。

舞台装置…3/5

- ・シンプルに 3 段程度の段が並べられていたのは、良かった。
- ・役者達が楽しく使えてたように見えた。
- ・天の岩戸の配置が見えにくかった。
- ・空想であり、簡素な舞台である分、“もの”で出てくると、逆に、みすぼらしく感じた。

照明、音響効果…3/5

- ・レビューショーが多いので、地明りが多く、平べったい感じがした。
- ・開演のブザー代わりにの語りは、良かったと思うが、聞きにくかった。

演出面など…3/5

- ・台本的に「古事記」である必要性を全く感じなかった。
- ・人がたくさん出て来るが、内容は分かりにくかった。
- ・全体がレビューショーとネタばかりで、物語が疎かになってしまったかも。
- ・衣装は綺麗だった。

役者（個人）…3/5

- ・みんなが楽しそうだった。
- ・全て口に出してるので、演技が良く分からなかった。
- ・ネタは古いが、身内が笑ってくれてた。（一般のお客様はどうだったか…）

役者（全体）…2/5

- ・関係性とかによる気持ちとかも、口に出してるので勿体なかった。
- ・共演しているというより、たくさんの個々の出し物を見たような気がした。

まとめ

演劇も「いろんな種類のものがあって良い」と思える公演だった。演者とお客様との距離が近いのは、“村祭り”感があって楽しかった。逆に言うと、浪漫座初体験のお客様にとっては、ハードルが上がってしまうのではないかなあとも思った。そういう意味で、レビューの中にも、何か残るものが欲しいような気がした。